

新型コロナウイルスと向き合ってきたこの1年

昨年の第26回学部長メッセージにも書きましたが、2020年1月に日本国内で新型コロナウイルス感染者が確認されてから既に1年5カ月、この間、最前線の医療現場をはじめ、様々な場所で新型コロナウイルスとの闘いに尽力されてこられたすべての方々に改めて心よりの敬意を表します。また、残念ながら、その闘いの渦中であつて、日本国内では1万3千人、全世界では375万人を超える方々がいのちを落とされました。しかも、この数字は日々増え続けています。この痛ましい出来事に、深く哀悼の意を表します。

この1年、私たちは、新型コロナウイルス

又という脅威と向き合い、様々なことを考え、模索し、「新たな日常」を築こうと努力してきました。本学でも、昨年度そして今年度と、新型コロナウイルスの感染状況を見据えながら、遠隔授業と対面授業をどのように組み合わせれば、学生諸君にとって、また、教職員にとって、安全安心で、かつ満足度、充実度の高い学びを、そして大学生活を実現することができるのかという課題に取り組んできました。本学においても、「新たな日常」の構築はまだ途上ですが、「コロナ禍を単に災いとして忌避するのではなく、「大学は学問を通じての人間形成の場である」を建学の理念とする本学だからこそ、これを新たな学びの、そして成長の機会と捉え、これからも「新たな日常」の構築に取り組んでいきたいと思っております。

学ぶことはわかること(三たび)

5月10日の『日本経済新聞』朝刊に掲載された二つの記事に注目してみよう。一つは、日経未来会議による「本学に大切なことは何か。01」です。そこでは、「新型コロナウイルスは私たちに何を気づかせてくれたのでしょうか。」から始まり、「この一年、「コロナとの闘い」と言われ続けていますが、本当に、「闘い」と向き合っていたのでしょうか。」と続き、「その私たち一人ひとりの行動変容、*筆者加筆」ためにも「コロナから何を学び、何に気づき、それを読者の皆さんと共有し、より良き未来のために何をすべきかを考えていけたらと思っております。」と結んでいます。

もう一つは、池上彰の「孤独は心を鍛えてくれる」です。池上は、「いま、世界の若者が新型コロナウイルスによる混乱の中で学んでいます。教室で授業を聞き、友だちと会話するという日常を奪われてしまいました。」と述べ、「君たちが、いま感じている孤独は心を強く鍛えてくれることでしょ。逆境の中でつかんだ手応えは、長い人生を歩み、学び続けていく大きな糧になります。悩み、迷うことは決して弱いからではありません。」とエールを送っています。

両者に共通するのは、この厳しい状況だからこそ、学ぶこと、そして変わることに意味を改めて問い直す、ということではないでしょうか。学ぶことによって現実と向き合い、学ぶことによって他者と関わり合い、学ぶことによりお互いを認め合

う。そして、この〇〇し合うことにより、私たちは変わっていくのではないのでしょうか。池上は「悩み、迷うことは決して弱いからではありません。」と述べていますが、悩み、迷うことが学びの原動力となり、成長の起点となるからではないでしょうか。

一昨年、昨年の学部長メッセージで、元宮城教育大学学長林竹二の「学んだことの証はただ一つで、何かがわかることである。」^③を紹介し、それは、「大学は学問を通じての人間形成の場である」という本学の建学の理念にも通じている、と述べ、その意味を考えてきました。「コロナとの闘いが正念場を迎えている現在、これまで以上にその意味を深く考えてみる必要があります。」^②「コロナ禍の向こうに何が見えていますか、何を指して歩んでいこう」としていますか、そこにはどのような自分そして相手がいって欲しいですか。「コロナ禍の経験の中で、私たちが感じ、気づき、考えたこと、悩み、迷い、戸惑ったことを大切にしながら、「コロナ後の私たちが創り上げていきませんか。」

①「日経未来会議」本学に大切なことは何か。01「日本経済新聞」2021.5.10朝刊21面
②池上彰「孤独は心を鍛えてくれる」『日本経済新聞』2021.5.10朝刊19面
③林竹二「教える」ということ(国士社、1999年、pp.105-106)

※本文中の数値は、2021年6月10日現在のものです。

MESSAGE

メッセージ

コロナ禍における「学び」の意味を改めて問い直そう

国際教養学部長 安井 一郎



YASUI Ichiro
筑波大学 教育学修士
■専門
教育課程、教科外教育
■担当科目
道徳教育の理論と実践
教育実習指導
教育課程論 等

「自分」を超えよう

経済学部長 倉橋 透



KURAHASHI Toru
東京大学 博士(工学)

- 専 門
不動産バブルの研究
空家の研究
住宅金融のあり方の研究
- 担当科目
都市経済学

しない。そういうことをやってみるんだ。すると、その分魂からこわばりがとれる。(中略) …こんなことひとつでも、人がやらねえことをやると、気持ちがひろがるんだ」。

気持ちが広がることで、昨日とは違う視点で自分自身を見つめ直すことができる。人間誰しも自己肯定する面と自己否定する面がある。自己肯定する面が少ないと自信喪失につながってしまうだろう。逆に、自己否定する面がないと、人間の成長にはつながらないだろう。

重要なことは、自己肯定する面、自己否定する面を頭の中で考えておくだけでなく、紙にきちんと書いて置くことである(学生さんの場合には、これはエントリシートに書かされる、自分の長所、短所に直結する)。紙に書くことで、自分の頭の中の整理につながり、言語化される。学生さんから「面接試験で言いたいことは頭の中にあっただけど、うまく言えなかった」ということを耳にするが、普段から言語化しておけば、十分対応できるものと考ええる。

自己否定する面については、自分の努力でカバーできるものかどうか見極めることが必要である(若いうちは、自分の努力で対応できるものが多いであろう)。

自分の努力で対応できるものには、目標をたて、その実現に向けて進んでいけば良い。学問でも、スポーツでもそうである。

一方で、自分の努力では対応できないものもある。極端な話、だれでもスポーツ

のスーパースターになれるわけではない。それに対して、対応したい、目標を実現したいと思って努力しても苦しいだけである。これを仏教では「求不得苦(ぐふとく)」。求めても得られない苦しみ」と言っている。四苦八苦の一つとする。重要なのは、そういう現実を受け入れて心豊かに過ごすことである(正直、これはなかなか難しいことではあるが)。資格試験に卒業後も挑戦し続け、結局うまくいかなかったということも聞いたことがある。

必要なことは、置かれた状況をよく観察し、その状況の中でできることとできないことを見極め、できることには最善を尽くす。できないことはそれを受け入れて、その中でこれまた最善を尽くすことであろう。一方で、置かれた状況もまた変化する。その変化にうまく対応していけるのか、それはその人物の力量と普段からの準備にかかっているものと思われる。

ともあれ、学生の皆さんはまだ若く、可能性に満ちあふれている。筆者は、そんな皆さんがうらやましくて仕方がない。どうか若さを無駄にせず、日々を有益にすごしていただきたい。

<https://dews365.com/archives/165032.html>



ダンスの「ボックスステップ」をご存じだろうか。ダンスニュースメディアDews(デューズ)のサイト(文末のURL、またはQRコード参照)では、次の動きとされている(右足から始めるボックスステップの場合)。

- ① 右足を左足の斜め前に出す
- ② 左足を右足の前からかぶせるように口入させる
- ③ 出していた右足を右後ろに引っ込める
- ④ 左足を左奥に引っ込める

自粛により運動不足になっていることもあり、こしばらぐ自宅で練習している。ただ、左足を前に出すときに右足にぶつかってコケそうになる。動画を見ながら練習するのであるが、下半身に注意を集中するあまり上半身の動きとバラバラに

なる、といったことが生じている。他人が見たら、酔っ払いの千鳥足と思うであろう(名譽のために言っておくが、その後の練習により、多少は上達したと自負している)。

運動不足の解消以外に、私がボックスステップを練習する理由は何だろうか。確かに60代になって、ボックスステップの練習をはじめ人間もあまりいないであろう。それは自分自身を変えたい、まだ成長したいと思っているからである。

山田太一氏の脚本「早春スケッチブック」(1983年、大和書房。フジテレビによるテレビドラマには、鶴見辰吾氏、山崎努氏、岩下志麻氏、河原崎長一郎氏らが出演)の中で、登場人物のこのような台詞がある。「普通の人間は、こういうことは